

明石の史跡（29）五ヶ所の番所



大坂夏の陣から4年を経過した元和5年（1619）6月末、上洛した将軍秀忠のもとから、急ぎ帰城した小笠原忠政は、以下にあげる五ヶ所の番所の設置を命令した。

- 明石浜（犬甘半左衛門）
- 大蔵谷（二木勘右衛門）
- 塩屋（春日淡路）
- 船木（船上であろう。小笠原主水）
- 藤江（小笠原隼人）

番所に詰める人数は、いずれも犬甘半左衛門家中の侍5騎・鉄砲頭2騎・足軽50人・小人20人という配備であった。建物の規模は、南向き2間梁20間。屋根は苔葺き、三方は葭簀で囲い、南は紋付の外幕をつける。さらにこの番所の東側に、2間に4間の櫓を建て、大筒を2～3挺据え付けるという物々しさであった。目的は、明石海峡を通過する船にたいする監視である。8挺立ての小船に侍2人と鉄砲2挺を用意し、西国からの船を吟味した。しかし高帆をあげて停止命令を無視して沖合を通過する大船には、船足が劣るため、空砲を2～3発撃つという、さながら臨戦体制に近いものがあつた。姫路藩にも同様の上意が下されたという（清流話）。

いったい何があつたのだろうか。この年6月2日、広島藩主福島正則が改易されている。理由は広島城の無断修築であつた。大坂夏の陣の終了後、加藤嘉明ら諸将の前で、家康がみずから疵を檢視して、「我鬼孫」（定本名将言行録）と自慢した忠政の対応（五ヶ所の番所設置）は、正則の豪勇ぶりを言外に物語るものであろう。